

---

# きよじ

リュシフェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きよじ

### 【Nコード】

N1470C

### 【作者名】

リュシフェル

### 【あらすじ】

孤児院（児童養護施設）から、孤児院へ。素直で、良い子だったのに。絶え間ない暴力。喧嘩に、明け暮れる毎日。それでも、ユーモアを忘れずに、なるべくなら、楽しく生きていこうと努力しつづけた一人の、そして多くの孤児たちの物語。

## 第一話：地獄へ

きよじ

リュシフェル

俺の名は、「きよじ」です。正式に書くと「東 清二」（ひがし きよじ）だが、多分、自分は、「きよじ」なんかじゃない。そんな事を考えながら、バスに揺られていた。山梨にあった、山中星美ホームという孤児院から、東京にあるサレジオ学園という孤児院へ、幼稚園児ら、小学生になり。だんだんと希望は、失望に、失望は、絶望に変わっていった。未来に、何も期待できなかった。なんてね。暗い話は、嫌いなので、楽しい物語に、しようと思う。それでは、はじまりはじまり。

2

「おーい。頭でつかち、なに、暗い顔してるんだ」

と、中山なかやま 勝雄かつおの声。こいつに、言わせると、俺は、「頭でつかち」らしい。ちなみに、こいつが、どういうやつかというと、星美ホーム（幼稚園）で、俺とどっちが、女にもてるかとか、どっちの方が、喧嘩が強いとか、その他、いろいろで、俺と張り合ってたやつ。いわゆる、俺のライバル的存在。口が達者で、かなりのお調子者。

（面倒くせえ）

「うるせーバ勝雄。今、これからの事について考え中だ」

「さては、びびったな」

「バス酔いしてるだけだ。てめーこれから俺たちが、行くところは、小学生どころか、中学生、高校生までいるんだぞ」

すると、バ勝雄は、少し考え、

「どうせ、きよじが、何とかしてくれるんだろ。きよじは、いいこちゃんだからなあ」

と、悪態をつく。さすがに、少しは、事情が呑み込めたらしい。

「どうするもなにも、さすがに、どうしようもねえだろ」

そここうしているうちに、バスが、新しい孤児院、東京サレジオ学園に、到着する。荷物を降ろし、バスが行ってしまつと、もう戻れないのだという感傷に苛まれえる。期待よりも、不安のほうが大きい。いつたい、何に期待すればいいのだろう。心が痛い。君に逢いたい。一緒に居たい。えーとちなみに、山中星美ホームからは、俺とバ勝雄のほかに、ながお長尾 けん謙とながお長尾 しん信という双子。永井 ながい勇あだ名、チャム。村内 むらうち公一 こういちあだ名、トンピリピン。由来、意味不明の、総勢六名だった。

東京サレジオ学園。当時、小学生から、中学生、高校生まで、のべ1000人位が、生活していた大規模な孤児院。広さは、東京ドームえつと：そもそも、東京ドームの、広さ自体がわからねえ。とにかく、かなり広い。近くに、小学校と中学校も、併設している。

親のいない子はもとより、片親しかいない子、経済的な理由の子、ここまでは、納得できる。救えないのが、悪ガキ、クソガキ、すぎで、親や施設が育てるのを放棄した子供までもが、サレジオ学園と一緒に暮らすことになる。ただでさえ親に見捨てられ、いい方向よりも、悪い方向に、傾きつつある子供たちが、悪ガキ、クソガキとミックスされ、さらに悪い方向へ、流される。俺が、放り込まれた施設、サレジオ学園はそういういわくつきな所だった。

だが、しかし、昔から、勤めている先生いわく、

「昔にくらべて、今の方が、ずいぶんましになった」

だそうだ。「どのへんが？」だそうだ。

「ようこそ、サレジオ学園へ。」

二人のシスター（修道女）が出迎えてくれた。一人が、シスター三宅、もう一人が、シスター佐藤。残念ながら、どちらもたいして、美人でも、キレイでも、無い。自己紹介。

「はじめまして。山中星美ホームから来ました、東 きよじです。」

「あなたが、きよじ君？」

二人のシスターに、同時に聞かれる。

「はい」

かわいく答える。

「ふーん。いろいろ聞いてるわよ。会えてうれしいわ。よろしくね。」

「

と、シスター佐藤。

「はい」

さらに、かわいく答える。恐るべき、幼稚園児以上、小学生未満。

「お前は、いいよなー。いいこちゃんだから」

と、バ勝雄。本物の馬鹿、カツオ。

「ふーん。星美ホームの子達は、みんな仲良しって聞いてたけどね」

え

と、嫌みたらしくシスター三宅。（ふむ、この狐目修道所とは、

距離をおこう）

ひととおり、自己紹介を終え、荷物を置く。すると、新入りが到着。って俺たちも、新入りじゃん。バスから、降りてきている最中にもかかわらず、掴みあい、殴り合いながら、



## 第一話 地獄へ 完全版

きよじ

リュシフェル

俺の名は、「きよじ」です。正式に書くと「東 清二」（ひがし きよじ）だが、多分、自分は、「きよじ」なんかじゃない。そんな事を考えながら、バスに揺られていた。山梨にあった、山中星美ホームという孤児院から、東京にあるサレジオ学園という孤児院へ、幼稚園児ら、小学生になりに。だんだんと希望は、失望に、失望は、絶望に変わっていった。未来に、何も期待できなかった。なんてね。暗い話は、嫌いなので、楽しい物語に、しようと思う。それでは、はじまりはじまり。

6

「おーい。頭でつかち、なに、暗い顔してるんだ」  
と、中山<sup>なかやま</sup> 勝雄<sup>かつお</sup>の声。こいつに、言わせると、俺は、「頭でつかち」らしい。ちなみに、こいつが、どういうやつかというと、星美ホーム（幼稚園）で、俺とどっちが、女にもてるかとか、どっちの方が、喧嘩が強いとか、その他、いろいろで、俺と張り合ってたやつ。いわゆる、俺のライバル的存在。口が達者で、かなりのお調子者。

（面倒くせえ）

「うるせーバ勝雄。今、これからの事について考え中だ」

「さては、びびったな」

「バス酔いしてるだけだ。てめーこれから俺たちが、行くところは、小学生どころか、中学生、高校生までいるんだぞ」

すると、バ勝雄は、少し考え、

「どうせ、きよじが、何とかしてくれるんだろ。きよじは、いいこちゃんだからなあ」

と、悪態をつく。さすがに、少しは、事情が呑み込めたらしい。

「どうするもなにも、さすがに、どうしようもねえだろ」

そここうしているうちに、バスが、新しい孤児院、東京サレジオ学園に、到着する。荷物を降ろし、バスが行ってしまつと、もう戻れないのだという感傷に苛まれえる。期待よりも、不安のほうが大きい。いつたい、何に期待すればいいのだろう。心が痛い。君に逢いたい。一緒に居たい。えーとちなみに、山中星美ホームからは、俺とバ勝雄のほかに、ながお長尾 けん謙とながお長尾 しん信という双子。永井 ながい勇あだ名、チャム。村内 むらうち公一 こういちあだ名、トンピリピン。由来、意味不明の、総勢六名だった。

東京サレジオ学園。当時、小学生から、中学生、高校生まで、のべ1000人位が、生活していた大規模な孤児院。広さは、東京ドームえつと：そもそも、東京ドームの、広さ自体がわからねえ。とにかく、かなり広い。近くに、小学校と中学校も、併設している。

親のいない子はもとより、片親しかいない子、経済的な理由の子、ここまでは、納得できる。救えないのが、悪ガキ、クソガキ、すぎで、親や施設が育てるのを放棄した子供までもが、サレジオ学園で一緒に暮らすことになる。ただでさえ親に見捨てられ、いい方向よりも、悪い方向に、傾きつつある子供たちが、悪ガキ、クソガキとミックスされ、さらに悪い方向へ、流される。俺が、放り込まれた施設、サレジオ学園はそういういわくつきな所だった。

だが、しかし、昔から、勤めている先生いわく、

「昔にくらべて、今の方が、ずいぶんましになった」

だそうだ。「どのへんが？」だそうだ。

「ようこそ、サレジオ学園へ。」

二人のシスター（修道女）が出迎えてくれた。一人が、シスター三宅、もう一人が、シスター佐藤。残念ながら、どちらもたいして、美人でも、キレイでもない。自己紹介。

「はじめまして。山中星美ホームから来ました、東 きよじです。」

「あなたが、きよじ君？」

二人のシスターに、同時に聞かれる。

「はい」

かわいく答える。

「ふーん。いろいろ聞いてるわよ。会えてうれしいわ。よろしくね。」

「

と、シスター佐藤。

「はい」

さらに、かわいく答える。恐るべき、幼稚園児以上、小学生未満。

「お前は、いいよなー。いいこちゃんだから」

と、バ勝雄。本物の馬鹿、カツオ。

「ふーん。星美ホームの子達は、みんな仲良しって聞いてたけどね

え」

と、嫌みたらしくシスター三宅。（ふむ、このキツネ目修道女と

は、距離をおこう）

ひととおり、自己紹介を終え、荷物を置く。すると、新入りが到着。って俺たちも、新入りじゃん。バスから、降りてきている最中にもかかわらず、掴みあい、殴り合いながら、ちっこいやつと肌の黒っばいやつが、どう見ても喧嘩している。

「荷物、持とうか？」

と、俺が聞くと

「うるせえ」とちっこいやつ。

「さわるな」と肌の黒っばいやつ。

（こいつらとは、うまくやっていけそうもない）

「おまえら、もう喧嘩するなよ。もう、着いたんだから」

と、泣きながら降りてくるのは、ミニゴリラ？いや、ゴリラ似の  
こども。

「うるせえ！ツバゴリ！」

「うるせえ！ツバゴリ！」

と、息の合ったコンビネーション。ミニゴリラは、余計に泣きだす。話をまとめると、この三人は、こども寮という所から、来たやつらで、ちっこいやつが、吉田 大地（よしだ 大地）あだ名、大根ベイビー。肌の黒っぽいやつが、佐々木 直人あだ名、なすび。泣いてるミニゴリラが、鈴木 翼あだ名、ツバゴリ。なんで、揉めてたかというと、バスの席のどこに座るかだったらしい。孤児院では、こんなくだらない事でも、喧嘩になる。面倒くせえ。

「今日は、あともう一人来るから」

みんなの荷物を一箇所にまとめながら、シスター佐藤が言う。ちよつとほくろが多い。

バ勝雄が俺の近くに来て、

「さすがに、星美ホームと違って大変そうだなあ」

「あたりめえだろ」

すかさず答える。夕方になって、もう一人到着する。名前は、松本 伸吾あだ名、しご猿。素直で、いいやつっぽい。

新入り（星美ホーム6名、こども寮3名、その他1名）が集められ、シスター達から、説明を受ける。そういえば、まだ寝る場所も決まってない。説明によると、ここは、サレジオ学園の「ねむの家」で、小学校1年生から、小学校3年生が、生活するところらしい。そこまでは、納得、お得。部屋は、大きい部屋がふたつ。20名ずつ位、収容できる。

「あの…あのね…」

「だいじょうぶ？」

と、シスター佐藤。なぜか、シスター三宅が涙目になっている。蚊の鳴くような声で

「あのね：どつちの部屋に、入るかなんだけど：」

もう、シスター三宅の目は、真つ赤だ。

「その前に、みんなに話さなきゃいけない事があるの：私、三宅シスターっていうんだけど：あの：私：わたしね：エイズなの」

「聞こえねえよ」

と、佐々木 直人。

(このなすび、いつか、ぶつとばす)

「ここからは、私が話すわ。私は、佐藤シスター。ここ、「ねむの家」は、部屋が二つあるの。それぞれを私と、三宅シスターが担当してるの。私が担当してる部屋がいいか、三宅シスターが担当してる部屋がいいか、とりあえず決めてちょうだい」

「おれは、三宅シスターの部屋でいい。エイズなんて怖くねーからな」佐々木 直人。

「おれも、そうする」吉田 大地。

「ぼくも：」鈴木 翼。

こども寮の三人は、三宅シスターの担当する部屋を選らんだ。

「俺は、後で決める」俺。

「おれも」中山 勝雄。

「ぼくは、佐藤シスターの部屋で」長尾 信。

「ぼくは、三宅シスターの部屋で」長尾 謙。

「ぼくは、きよじと同じがいい」永井 勇。

「びくは、かつおと同じがいい」村内 公一。

「さて、運命の分かれ道。どうする？バ勝雄ちゃん」と俺。

「早く、決めるよなー。星美ホームのやつらは、へなちよこが多いらしいからなー」佐々木 直人。

「俺は、いつか、佐々木 なすびをぶつとばす。」俺。

「じゃあ、おれも。」中山 勝雄。  
佐々木 直人<sup>なすび</sup>びびる。

「俺は、佐藤シスターの担当する部屋でいい。ハヤトが、いるらしいから」俺。

「ハヤトがいるのか。じゃあ、おれは、三宅シスターのへやがいい」  
中山 勝雄。

（ハヤト）山中星美ホームでの二つ先輩。ボス猿。以前、俺と喧嘩になったことあり。勝敗は、秘密。この事を中山 勝雄<sup>バかつお</sup>は、知らない。

以上、第一話おわり。

## 第二話 枕戦争

きよじ 第二話 枕戦争

リュシフェル

新しい部屋もきまり、荷物を置く。大きな部屋にあったのは、それぞれ一人分のベットとタンスだけ。

「やっぱり、お前は、こっちの部屋を、佐藤シスターの部屋を選んだか」と、ハヤトに言われる。(ハヤト・あだ名、ヤトさん。俺よ、二つ年上。運動神経抜群。頭も、キレル。俺と同じ、山中星美ホーム出身。喧嘩では、同学年とそれ以下では、無敵。過去に、俺と対戦あり。四月から、サレジオ小学校三年生。)

「ヤトさん、だっけ？ハヤトが、その方が良いつて言ったんじゃないですか」

「三宅シスターの担当している、向こうの部屋は、こども寮出身ばっかだし、エイズのやつも、いるからな」

「ふーん。それですか」

「とりあえず、一年間よろしくな」

「よろぴく」

その夜、ハヤトに蹴り起こされる。なぜか、枕を持っている。

(面倒くせえ)

「何すか？」

「お前は、知らないだろうけど、サレジオ学園、ねむの家伝統、枕戦争が、これから始まる」

「だから、何すか？」

「お前は、きよじは、強制参加だ」

さてと、説明すると夜、みんなが寝た頃に、各部屋の主だった者

が、枕片手に、違う部屋のやつら、特にむかつくやつらをよってたかってボコボコにするというサレジオ学園ねむの家伝統の行事らしい。小学校一年生から、三年生の男子だけしかないのに、この有様。先が思いやられる。

「俺は、いいや、特にむかつくやついないし、面倒くさいし」

「おいっ」

ハヤトが下っ端に、何かを命じる。

「てめー」

すると、フミオが、枕片手に殴りかかってくる。俺の頭に、必殺の一撃。少し、いやだいたい痛い。

「ふーん。枕って、寝るための道具だとばかり思ってたんですけど」  
そんな事を言っている間にもう一撃くらう。さすがに、むかついたので、フミオの鼻めがけて、渾身の一撃。フミオの鼻から、鼻血が滴り落ちる。

喧嘩のコツは、相手よりも、強く殴り、強く蹴る。それで、根性さえあれば、まず負けない。それでもだめな時、例えば、相手の方が体格や力が、上の時は、頭を使う。（頭突き？）それも、かなり有効だが、ただ殴るのではなく、鼻、次にテンプル、そして、首根っこつつ捕まえて後頭部から、地面に叩き落とす。とか、蹴りなら、まずロー、そして、金的。（反則？）とか。後は、喧嘩慣れすることです。ちなみに、俺の場合は、相手が柔道をやったら、柔道技で、空手なら空手で、ボクシングならボクシングで倒すのが、大好き。

「もう、勘弁してください。もう、勘弁してください」

フミオが泣き叫ぶ。文字どおりボコボコにした。ちなみにフミオは、俺よりひとつ年上で、四月から小学校二年生。俺とハヤトと同じ、山中星美ホーム出身。山中星美ホームでは、俺と大の仲良しだ

った。(それなのに、何でこんな事になるんだ)

「さすがだな」

と、少し焦りながらハヤトは言う。俺は、枕で素振りをしながら、「で、ためーはどうするんだ」

「お、俺はいい。もう、きよじとは、一度喧嘩してるし、もうすぐ時間だし。おいつフミオ起きろっ」

ハヤトがフミオに、蹴りをいれる。よろよると、フミオが起き上がる。鼻血が止まらず、ところどころ顔も腫れ始めている。それでも、ハヤトの言うことは、聞くらしい。

「じゃっ行くか」と、ハヤト。

「今日は、もう無理です」と、フミオ。

「じゃっ行くか」と、俺。

ハヤトと俺の二人で、フミオのケツを蹴り飛ばしながら、目的の場所まで進む。そこは、二つの大部屋のちょうど中間地点だった。

そこには、もうすでに、三人の少年が待ちかねていた。横山 ヒロユキ、横山 ケンジ、そして、バかつお。三人とも枕を持っていた。

「おせーじゃねえか」(ヒロユキ：四月から、サレジオ小学三年生)

「おせえぞっ」(ケンジ：四月から、小平市立第三小学校二年生)

「よおっ」(カツオ：俺と同じく、四月から、第三小学校一年生)

とりあえず、ハヤトと俺で、話し合う。

「きよじが、ヒロユキとケンジを何とかしろ。二人とも俺たちとは違うことも察出身だから」

「ハヤトは？」

「俺は、見てる」

「何だそれ」

「いいからやれ」

「面倒くせえ」

とか言ってる間に、ケンジに枕で殴られる。つづいて、ヒロユキ

に、ついでに、バかつおにも、枕でおもいつき殴られる。そして、ボコボコにされる。何とか、顔と頭は手でガード。が、どうガードしたって手は、二つしかない。ガードの隙間から、枕、拳、肘が飛んでくる。ハヤトを見る。ニヤニヤ笑っている。フミオを見る。目すらあわせてくれない。同じ、星美ホーム出身たって、こんなもんだ。

(しょうがねえ)

こういう時は、敵のトップから、つぶすに限る。この場合、ターゲットは、一番年上のヒロユキだ。なるべく、自分のガードをゆるめずに、左ジャブ。打つべし、打つべし。鼻血が吹き出るヒロユキ。すると、ケンジが枕を捨てて、襲いかかってくる。半身でかわし、髪の毛をつかみ、腹に膝げり。怯んだところを右のこめかみに、右フック。コツは、最後まで一気に振り下ろす。バかつおは、目を見開いて、口をあんどぐり。

「さあ、どうする？バかつおちゃん？」

「きよじ、強かったのか？」

「さあ？どうするバかつおちゃん」

すると、ヒロユキとケンジから、

「まいった」

「今まで、喧嘩した中で一番強いぞ」

との、声。ハヤトとヒロユキが話し合い、これから俺は、枕戦争には、参加したい時にしか、参加しない、ということを決着。こうして、枕戦争初日は終わった。

以上、第二話終わり。

### 第三話 けつバット

きよじ 第三話 けつバット

リュシ

フェル

もう、一人のシスターが紹介された。名前は、シスターテレジア。  
(あだ名、ジャンボ。通称ジャンボ・テレジア)

「明日の日曜日、広場でドッチボールするから」  
するとみんなが、

「また、かよ」

「もう、いいよ」と、もらす。

「別に来なくてもいいけど、けつバットよ」

(けつバットって何だろう?)

当日、ハヤトとヒロユキが、なかなか、広場にやって来ない。その間に、ドッチボールのルールと説明が行われた。やっと、ハヤトとヒロユキが、やって来たが、二人とも傷だらけだ。どうやら、喧嘩をしてたらしい。ふむ、よくある事だ。が、ジャンボ・テレジアが、遅れてきたわけを聞き、怒る。

「いいわけは、どうでもいいのよ」

と言いながら、ハヤトとヒロユキのケツめがけて、プラスチック製のバットで、フルスイング。さすがに、これは、やりすぎだと思っただ。ついでに、けつバットの意味も、分かった。そして、ドッチボールがはじまった。俺の役目は、球拾い。まだ、小学校一年生にもなっていないかったので、しょうがないかなと思う。

ドッチボールを観察する。ルールを把握する。役目は、球拾いなのだが、ボールを拾おうとすると、さわるんじゃねえと怒鳴られた。だから、ただ見てるだけ。でも、ないかな。俺なりに、コツを見つ

けようとす。よく観察すると、ボールに当たって、コートの外に出されるやつは、むやみに、闇雲にボールをキャッチしようとしている。要するに、コートの真ん中付近で、ボールをよけつつ、確実に取れるボールだけを取る。そうすれば、多分、大丈夫。なはず。やがて、コートの中にいるのは、二人だけになった。一対一。ハヤトとヒロユキだ。(けつバットくらつても大丈夫だったんだ)

「いつも、この二人が残るのよね。これじゃあ、つまらないわ」

と、審判をしていたジャンボ・テレジアが、言う。そばには、バットが転がっている。怖いかも。バットじゃなくて、バツタだったら、よかつたのに。ジャンボ・テレジアが、

「あと一人ずつ、入りなさい。星美ホーム出身から一人、こども寮出身から一人。新入りの中で、誰か、やる子いない？」

バかつおを見ると、首を横に振っている。

「俺、やります」と、俺。

「おれ、やる。星美ホームのやつらは、弱っちいからな」と、なすび。こいつは、顔がどう見ても、なすびだ。本名、佐々木 直人。

さてと、どうなったかというと、同じチームで同じ部屋どうし、対決。ハヤトと話し合い、先に、なすびを狙うことで合意、調子こいて前に出てきた、なすびのそれも、わざと顔面をねらった、俺の球がヒット。なすび、キれる。しかし、ハヤトの蹴りが、なすびの股間をヒット。なすび、泣き出す。ヒロユキまで、笑う。時間ぎれ。結果、二対一で、俺たちの部屋の勝利。ちなみに、なすびちゃんは、狙われたとジャンボ・テレジアに、告げ口したが、シカトされる。でも、俺はかわいそうとは、思えない。

以上、第三話終わり。



## 第四話 ピカピカの一年生(前書き)

やっと小学校一年生。ではでは。

## 第四話 ピカピカの一年生

### 第四話 ピカピカの一年生

リュシフェル

やっと、サレジオ学園ねむの家にも慣れてきた。そして、春を迎えた。小学校に入学する事になり、準備に追われる。入学先は、小平市立第三小学校。多摩にある、何の変哲もない普通の小学校だ。入学式の記念撮影の後で、担任の先生を紹介された。名前は、曾務川先生という女性の先生らしい。(顔がだらーんとしていて、ブサイクだ。後で知ったことだが、どうやらダウン症の一種らしい) はじめに、先生の自己紹介があり、(ダウン症の話は、出なかつた)そして、みんなの自己紹介が、始まる。さりげなく、可愛い子がいなかチエツク。自己紹介を終えると曾務川先生がこう切り出した。

「わたしのクラスには、サレジオ学園という孤児院から来てる子が三人います。鈴木 翼君、長尾 嫌君、東 きよじ君です。サレジオの子は、危険で凶暴なので、みんなあまり、かわりあわないようにしましょう。いいですね」

(ふーむ。このくらいのは、予想の範囲内だ)

「はい」

俺が、一番大きな声で、一番可愛く答える。翼と嫌は、ずっと下を向いている。これしきの事で、だらしねえ。下校の時刻になり、帰ろうとすると、曾務川先生に呼び止められる。

「君が、一番大きな声で返事してたわね。いい、サレジオの子には気をつけるのよ」

「はい。危険で凶暴なサレジオ学園の東 きよじです。先生、早く顔と名前を覚えてくださいーい」

「嘘でしょ?」

「本当だぴょーん。それでは、失礼しまーす」

こうして、入学式は終わった。

これからは、小学校と孤児院サレジオという二重の生活を送ることになる。面倒くせえ。俺にとって小学校（三小）は、楽園だった。誰からも強制や命令もなく、喧嘩もほとんどしなかった。ただ、スカートめくりは、正直してみたかった。恥ずかしくてできなかったけど。それに比べて、孤児院サレジオは、地獄とはいかなくても、それに近いところだった。枕戦争（夜、嫌いなやつや、適当なやつを何人かで、枕や蹴りでボコボコにする）が毎晩あったし、喧嘩は無い方がありえない状況だったし、掃除は強制で後輩の仕事だった。そのほか、先輩のわけの分からない命令も聞かなければならなかった。だから、俺は常に先輩と喧嘩をしていた。その中で、自分なりに喧嘩のコツを学んでいった。

そんなある日、シスター佐藤に呼ばれた。

「きよじ、大事な話があるの」

「何じゃらほい」

「フジテレビの（白い巨塔）っていうドラマのオーディションがあるの」

「それが、どうかしたのですか」

「それに、清二きよじが行ってほしいの」

「何で俺が？」

「最初は、ハヤトがいるから承諾したんだけど、ハヤトがどうしても行きたくないっていうの。向こうとしては、孤児院の子がどういふふうか知りたいらしいの」

「どうしても、行けと」

「学校休んでいいから。お願い」

「分かりました。行くだけいってみます。落ちても知りませんよ」

「やったー。これで何とかいい返事ができる。急なんだけど明後日、車でフジテレビまで送るから」

「ハイ、ホイ」

以上、第四話終わり。

#### 第四話 ピカピカの一年生（後書き）

第五話は、ドラマ「白い巨塔」<sup>ひがしきよじ</sup>（田宮二郎主演）のお話です。目も見えない少年役で、俺、東清二<sup>ひがしきよじ</sup>が、出演していたはずなのですが、DVDには出てきていません。何か分かる方は、ぜひぜひ、情報を。

## 第五話 白い巨塔 オーディション(前書き)

A - 長らく更新しないで、申し訳ありませんでした。言い訳させてもらつと、引越しやら、いろいろあったので。これから、よるびく。

## 第五話 白い巨塔 オーディション

### 第五話 白い巨塔 オーディション

リュシフェル

フジテレビに、到着。どうやら、オーディションがあるらしい。ガキがいっぱいいる。あっ、俺もガキだ。

「ここにすわって、いい子にしててね」

「はい」一応、かわいく答えておく。何か、偉そうなオッサンが出てきた。

「えー、今からオーディションを始める。名前呼ばれた人から、こちに来るように。まずは、見本」

「はい、足が悪い人やります」とても可愛らしい女の子が演技を始めた。足をひきずり、とても痛そうだ。

「痛い、痛い」演技が終わった。

「今の演技以上じゃないと合格させません」と、また偉そうなオッサンが言った。

オーディションが始まった。

「痛い、痛い」と泣き叫ぶやつ。大げさに転ぶやつ。ただの学芸会が始まった。そして、俺の順番がきた。

イメージは、足が棒になったように。左足を軽く前にだし、右足は、ひざを曲げずに、そのまま左足までもっていく。決して大げさではなく、声も出さない。ただ、たんたと前へ、前へ。

「名前は？」

「東 きよじです」

「どこの劇団だ？」

「サレジオ学園」

「サレジオ？聞いたことないな」

「あつ孤児院です。何か、孤児院の子がどういふうか知りたかったらしくて」

「お前、孤児院の子なのか？」

「はい」

「合格だ」

「えっ？」

「ひとつだけ教えてくれ。何で、声もださなかったんだ？」

「テーマが足の悪い人だったので、いくら足が悪くたって、普通、声をあげたり、わざわざアピールしたりしないでしょ」

偉そうなオッサンが、見本の演技をした女の子を呼んだ。

「広末、お前も見習えよ」

「はい」(どっかで、見た顔だ)

「孤児院の子、名前は？」

「だから、東 きよじです」

「広末と東、合格。これから一緒にやっていくから仲良くするよ」  
「オッサンがいなくなる。」

「始めまして、東です」

「はじめまして？広末 涼子です。きよじって本名ですか？」

「ほい」

「ほい？リョーチンで分かりませんか？」

「へい？」

「もう、やっと会えた。今どういう状態？」

「孤児の中の孤児、完全に親がない状態」

「大丈夫なの？」

「さあー、どうでしょう。よろしくお願いします」

「もう、分かっただけ」

オッサンが帰ってくる。

「お前ら、何を話してたんだ？まあ、いい。後で、ドラマ(白い巨

塔)の主演田宮 二郎を紹介してやる」

「別にいいです。帰ります」と俺。

「何でだ？ドラマに出れるんだぞ」

「いいです。シスターに、テレホンカードもらったので、電話して帰ります。ありがとございました」

「やだ。絶対やだ」と広末。

「とりあえず、明日までは居ろ。テレカは、オレが預かっておく」

「あー、面倒くせえ。」

とりあえず、合格。以上。

第五話 白い巨塔 オーディション(後書き)

A - 実話です。

## 第六話 白い巨塔 其の一（前書き）

孤児院から、孤児院に引越し、ひよんなことから、ドラマ出演。ドラマのタイトルは、「白い巨塔」（田宮二郎主演）です。

## 第六話 白い巨塔 其の一

白い巨塔 其の一

リュシフェル

「主演の田宮二郎だ」と、オッサンが言う。白衣姿だ。

「はじめまして、ただの、松田優作の生まれ変わりの東きよじです」と、俺。

「嘘だろ?」と、田宮二郎。

「そう思っていたいで結構です」と、俺。

監督は、広末に演技指導している。広末の目には、包帯が巻かれている。

「いいか、涼子。目の見えない演技は、女優としての腕のみせどころだ。しっかりやれよ」と、監督。

「はい」と、広末涼子。広末とともに、監督にドラマの病室のセットにつれてかれる。俺には、松葉ずえとギブスがプレゼントされた。

「はい、リハーサル入ります」と、ADが大声をあげる。

病室のセットのベッドに、目に包帯を巻かれた、広末が座っている。そばには、看護婦役の女優が、何人かいる。

「じゃあ、広末ちゃん、目が見えなくて、手術で見えるようになってた役ね」

「はい」と、広末。病室に、田宮二郎が入ってくる。看護婦が、広末の目につけられた包帯をすると取ってゆく。

「わあ、先生、ありがとうございます。やっと、目が、見えるようになったになりました」と、広末。

「うむ」と、田宮二郎。

(何だ、ただの大根役者じゃん)

リハーサル終了。

「きよじ、私の演技どうだった？本番は、もっといい演技できると思うけど」と、広末。（かわいいかも）

「あのな、りょーちん。目が見えるようになったら、最初の一言は、まぶしいだろ」と、俺。

「あつ、でも、台本には書いてなかったよ」と、広末。

「俺は、台本どつりにしかできない役者を大根役者と呼ぶ」

「そうなんだ」

「まあ、気にするな。本番をまぶしそうに、演技すればいいんでない？」

「うん。そうしてみる」と、広末。くやしそう。

「だったら、お前がやってみろっ」

監督、ぶちきれぬ。以上。

第六話 白い巨塔 其の一（後書き）

この後、俺の演技力がためされ、怒涛の「白い巨塔」編に、な  
っていくと思います。

## 第七話 白い巨塔 其の二（前書き）

ドラマ「白い巨塔」出演が決まり、リハーサル。演技力が試されていると聞きます。

## 第七話 白い巨塔 其の二

### 白い巨塔 其の二

リュシフェル

広末に、演技指導したせいで、監督に怒鳴られる。

「はい、ほい。だったら、俺がやって見せます」と、俺。どうも俺は、意地っ張りだ。病室のセットのところまで行き、看護婦役の女性に、話しかける。

「女優の方ですか？」と、俺。

「女優ってほどでも、ないですけど」と、看護婦役の女性。

「あの、俺の設定は、孤児院のガキで。それと、俺が何を言っても、目が見えてないと思ってください」と、俺。

「わかったわ。孤児院の子で、何をいつても、実は目が見えてない」  
「よろしくお願いします」俺の目に、包帯が巻かれる。

「リハーサル入ります」

俺は、病室のベッドに、座らされている。

「先生、術後の経過ですが」と、看護婦。

「見えるようになったはずだが」と、田宮二郎。

カーテンが閉められる。そして、包帯がするする解かれる。

「わあ、見えます」と、俺。看護婦、困惑。

「よかったな。もうすぐ、退院できるぞ」と、田宮二郎。

「本当に見えるの？」と、看護婦。

「やったあ、これでオウチに帰れる」と、俺。看護婦役の人が、俺の前で指をふる。

「これ、何本？」

「あの、えーと。先生、ありがとうございました」と、俺。

「オウチないでしょ？」と、看護婦。田宮二郎、困惑。

「それでも、もう帰りたい」と、俺。

「ちゃんと見えるように、なつてからね」と、看護婦。

「見えますから、わあ、見えたー」と、俺。

「見えていないのか？」と、田宮二郎。

「えーと、今のところは、ただぼんやりと、暗いか明るいかわかるだけです」と、俺。

「先生、失敗ですか？」と、看護婦。

「いや、いまの時点では、何とも」と、田宮二郎。

「わあー、見えるよっ」と、俺。

「もう、いいから。ねっ」と、看護婦。

そして、また、包帯が俺の目に巻かれた。

「先生、次は見えるようになりますか？」

リハーサル終了。

「監督、この子、メインでいきましょう。ばっちり、撮るとききましたから」と、カメラマン。

「わかった、田宮二郎と相談する」と、監督。

「きよじ、すごい。」と、広末。

「いやー、それほどでも。でへでへ。」と、俺。

第七話、以上。

## 第七話 白い巨塔 其の二(後書き)

A - まず、読んでくれて、どうも、ありがとうございます。続編も、読んでくれたら、幸いです。それと、

「AP 吾妻涼」という、「コメディ」も、書いています。そちらの方も、よろしくお願いします。

第八話 白い巨塔 其の三（前書き）

いやいやながらも、白い巨塔出演が決まり、監督と田宮二郎、そして広末涼子と話し合っているところですよ。

## 第八話 白い巨塔 其の三

「白い巨塔 其の三」

リュシフェル

フジテレビのスタジオで、監督と田宮二郎と向かい合って座らされた。二人とも、表情は硬い。

「もう、リハーサル終わったので帰りたいんですけど」と、俺。クソ、面倒くせえことになってきた。

「君を使いたい」と監督。

「私も、そう思う」と、田宮二郎。

「俺、別に、役者志望ではないので。では、では「面倒くさいことの嫌いな俺」

「君、普通、誰でも役者になりたがるぞ」と監督。

「俺、普通じゃないんで」と、俺。

「私も、普通じゃない」と、田宮二郎。

「たしかにお前は普通じゃない。だって大根役者だし」と、俺。監督、苦笑い。田宮二郎、悲しそうな顔をする。

「わかった。ちょっとだけでいいから出演してくれ」と、監督。

「じゃあ、広末涼子さんがいるまでなら」と、俺。

「どういう関係なんだ二人は？」と、監督。

「ただの運命の二人です」と、俺。んー、ちょっとかつこいいかも。

「どうしたら演技がうまくなるんだ？」と、田宮二郎。

「俺が辞める時教えます。俺が教える気があるんですけど」と俺。わかった。末永くよろしくな」と監督。

「監督、こいつ松田優作の生まれ変わりって言ってましたよ」と田

宮二郎。

「ウチの涼子も、そう言っていた。なんとか使いたい」と監督。

(小さな声だけど聞こえているよっと)

広末涼子が呼ばれる。

「涼子、役交代だ。涼子が足の悪い役。こいつが目の見えない役。いいな?」

「はい、お父さん。じゃなかった監督。」かわいいー。

「おとうさん?」と、俺。

「ああ、私は涼子の父親だ。涼子が小さいころから、演技の英才教育を施した。なあ、涼子?」と、監督。そうだったのか。

「はい。でも、きよじに勝てない」と、広末涼子。かわいいー。

「勝とうとするんじゃない。どっちが目立てるかでもない。脇役でもない要は自分のフィールドに持ち込めればいい」と、俺。

「フィールド?」と、広末。

「領域という言葉でもいい。自分なりの世界観を出せればいい」と、俺。

「なんとなくわかったような気がする。きよじの世界観は?」

「女こそすべて」

「ふふ」と、広末。

「ウソぴょーん」と俺。

「ふたりの本番の演技を見てみていい方を長く使うからな」と、監督。

「はい」と、広末。いい返事だ。

「涼ちゃんが辞めたら、俺も辞めるんですけど。女こそすべて」と俺。書き直された台本を渡される。

「なるべく早く本番入りましょう」とスタッフ。

「こいつらが台本、覚えたらな」と監督。

「本番はいりまーす」以上。

第八話 白い巨塔 其の三（後書き）

グズグズですいません。次からはリハーサルではなく、本番が始まります。次も、よろしくお願いします。

第九話 本番 広末去る（前書き）

ドラマ「白い巨塔」の本番が始まったところです。

## 第九話 本番 広末去る

第九話 本番 広末去る

リュシフェル

俺に代わりの台本が渡される。中身は生まれつき目が見えなく、目の手術を受けに入院したと書いてある。だいたい読み終わり、俺の唯一この現場で心を許せる広末涼子の偵察に行く。歩けない役なのでギブスをつけているところだった。正確にいうとギブスをつけているように見せているところだ。

「りょーちん痛くないそれ？」

「きよじ心配してくれるの？」ちよつと広末涼子うれしそう。

「まあねー、台本読んだ？」

「うんっ」かわいいー。

「どう思う、このクソ台本？」

「うん、私女優になるのが夢だから頑張らないと」健気。

「そっかー。俺は早く帰りたいんだけどね」

ドラマ「白い巨塔」の本番が始まった。ちなみに俺は目が見えるようになり退院すると台本には書いてある。まずは広末涼子の出番だ。

「先生ありがとうございます」広末涼子のギブスが割られ、足の状態を田宮二郎が診ている。

「もう大丈夫だから」と田宮二郎。大根？

これだけで広末涼子の出番は終わった。気のせいかちよつとさみしそうだ。次は俺の出番。セットを移動する。

俺の目に巻かれた包帯がするするととられる。怪訝な表情な俺。

「もう大丈夫だから」と田宮二郎。大根。看護婦役の女性が俺の目の前でペンライトを振る。

「はあー、見えるとはどの状態をいうのですか？ なにも変わりません」と俺、虚ろ。

「も、もう大丈夫だから」田宮二郎、困惑。台本には手術の結果俺の目は見えるようになったと書いてある。

「先生、もういいですから。もともと見えなかったものでどうでもいいです。期待は痛いですからね」優しい俺。

「先生どういことですか？ 見えるようになるんじゃないかなかったですか？」眉間にしわを寄せた看護婦役の女性。

「お、おかしい。何で見えないんだ」監督を見る田宮二郎。しかし監督も困惑している。だってこんな展開、台本には書いてないのだから。

「先生、目が見えるようになると何かいいことありますか？ 例えば女神を得るとか」

「女神？ 何だそれは」さらに困惑する田宮二郎。

「ただの言葉遊びです。先生、目が見えないと音が見えるんです」少し微笑む俺。

「お、音が見える？」

「はい。先生、目が見えることは普通のことですか？」

「あ、ああ」

「じゃあ僕は普通じゃないのですか？」

「い、いや」再び監督を見る田宮二郎。

「宣誓、僕はくじけません」右手をうえにかざしながらの俺。

「ああ、分かった。もういいだろ」もう、しきりに監督を見る田宮二郎。

「先生、ありがとうございます。宣誓、僕はあきらめません。先生、さようなら」少し疲れた俺。カット。

「監督、これ全部使いましょう。すげー、こんなの初めて見た」とチーフカメラマン。田宮二郎と監督は何やら話しこんでいる。俺も広末涼子と何やら話し合い。中身は内緒。監督に俺と広末が呼ばれ

る。

「涼子もう帰っていい。充分だ。きよじ君は残りなさい」

「はい。きよじは？」哀しそうな広末の瞳。

「帰りまーす。もう、充分です俺」りょーちんに会えなくなるのは、ちよっぴりさみしいけど。

「お父さんじゃなかった監督、私もきよじの演技見ていたい」

「もうすぐ学校が始まるだろ」

「はい」涙目の広末。

「きよじ君は残りなさい。次の撮影があるから」と監督。

「はい？りょーちん帰るなら俺も帰ります。そういう約束でしょ？」

と俺。監督、困惑。

「あんな演技されて帰せるかつ」と監督怒鳴る。

「きよじ、バイバイ」涙がぼろぼろ落ちる広末。

「はあー、なんじゃこりゃ」疲れきった俺。以上。

第九話 本番 広末去る（後書き）

なかなか更新せず申し訳ありませんでした。今後ともよろしく願  
いします。

## 第十話 続く撮影(前書き)

フジテレビのテレビドラマ「白い巨塔」に出演して、撮影が進んでいると聞きます。

## 第十話 続く撮影

### 第十話 続く撮影

リュシフェル

広末涼子がいなくなったあと、撮影は続く。だがこのむなしさは何だろう。毎日コンビニ弁当で、撮影が無い日でも目には包帯が巻かれている。役作りだそう。手探りで食事をとる。これじゃまるで動物だ。

夏休みも終わり小学校も始まっているのにテレビドラマ「白い巨塔」は反響が大きく長きにわたって放送が続いていた。時にはこんな会話を耳にした。

「監督、このまま上手くいけば借金返せそうですよ」

「こんなドラマが数字取るとはな。あのガキが出るようになってからだ。上手く使おうぜ」主演の田宮二郎と監督の会話だ。文字どうり俺は飼い殺しにされ上手く使われていた。こんなドラマに、監督がそう思っているドラマに。出演料も無く自由もなく。その中で唯一、楽しみにしていたのが二日に一回のスタイリストさんによるシャンプーだった。美人というわけではないが性格のいい素敵な女性だ。

「きよじ君、何でいつも包帯目に巻いてるの？」

「それは君の美しさで目がつぶれないためだよ」役作りのために強制させられてるなんて言えるかい？それにいつの日も、冗談を忘れずに。

「ふふん。きよじ君、何でどんどん元気がなくなっているの？」

「それは素敵な女性がそばにいないからだよ」

「もう。きよじ君はいつまでいてくれるの？」

「それは、正直できれば今すぐにも帰りたい。ウチ、孤児院だけだ」

「きよじ君、家族は？」

「それは誰かと結婚すればできるんじゃないかと。あーあ」涙を目にいつぱいためて後ろからやさしく抱きしめてくれるスタイリストさん。おかげで俺はびしょぬれだ。そして邪魔者が。

「おい、お前らいちやついてんじゃねえ。台本できたぞ」それだけ言い残し立ち去るクソ監督さん。

「ねえ、きよじ君。ここはきよじ君にとっていい場所ではないの？」

「はい、残念ながら。シャンプーありがとございました。びしょぬれですが」

「うん、私もびしょぬれ。ふふ」やさしいスタイリストさんでした。

台本を読む。といつてもいつたん頭に入れるだけでことこまかく覚えるわけではない。いつも、流れしか頭に入れてない。テレビドラマ「白い巨塔」は最初は派閥争いがどうのとか教授選がどうのという話だったらしいが俺が出演して以来、俺と田宮二郎の絡みばかりになっていった。ただ、俺はすぐアドリブを言うので周りのスタッフからは好評だが、田宮二郎や監督からは苦情を言われていた。

「先生、きよじ君の目はいつ見えるようになるのですか？」と看護婦役の女性。そうそう、俺は実名で出演していた。

「もうすぐだ。時期見えるようになる」と田宮二郎。毎回、こんな会話だ。

「先生、見えるようになりました。先生に渡された薬が効きました」これがアドリブ。目が見えるようになったとは書いていない。田宮二郎が混乱すると監督が撮影を止める。

「なあ、何で台本どつりにやらないんだ。これだけアドリブばかりだと収録の都合上、放送しないわけにはいかないだろう」と監督。ちなみにアドリブは収録の後半に限る。使わざるえないから。ほかにも田宮二郎に撮影中に家族のことを聞かれ、家族はいないと物心ついたころには東宮御所にいたと、疑うなら東清二ひがしきよじという名前ひがしきよじで問い合わせてみると言い、宮内庁も表向きにはそれは認められないと

ただ、早く戻ってきてほしいと答えられたこともあった。そんなこんなが評判を呼び大きな反響がとなり、撮影は予定外の長期にわたって続くことになってしまった。

ちなみに田宮二郎と監督は視聴率がすさまじいため、当時の金額で一億のボーナスをもらっていた。俺はコンビ二弁だけだったのに。

ある日、フジテレビの社長に呼ばれフジテレビとしては今後、どうやってかかわっていけばいいのかと聞かれた。「白い巨塔」は大きな反響とともに俺のことを心配する苦情も殺到していたのだ。学校に行かなくていいのかと、本当に東宮御所にいたのかとか、それが本当なら皇位継承権はどうなるのかとか。さすがに社長も苦りきっていた。宮内庁が、本人にその意思があるのなら皇位継承権があると非公式に認めるとフジテレビに通告してきたのだ。まあ、本人にその意思がなかったのだけど。そして、その話はいつのまにかうやむやになってしまった。フジテレビ側にはフジテレビ側の面子があつたらしい。以上。

## 第十話 続く撮影（後書き）

読んでくれて、どうもありがとうございました。今後とも、よろしくお願ひします。

第十一話 高倉健、登場（前書き）

フジテレビのドラマ「白い巨塔」の撮影中です。

## 第十一話 高倉健、登場

第十一話 高倉健、登場

リュシフェル

フジテレビのドラマ「白い巨塔」の撮影はまだ続いていた。これだけ続くとさすがにしんどい。とつくのとうにやる気は失せていた。「おい、大物がくるからおとなしくしてるよ」監督に言われる。俺、おとなしくしてるじゃん。大物って誰だろう？俺が目当てだったらいいのにな。もう、疲れたよ。何かきっかけがほしい。

「高倉健です」おじさんが挨拶まわりをしている。スタッフみんなが恐縮して喜んでいる。

「高倉健です」スタイリストさんは飛び上がって喜んでている。

「高倉健です」田宮二郎も、ただただ恐縮している。

「高倉健です」監督も喜んでている。だんだん声が近づいてくる。

「はじめまして、高倉健です。東きよじ君、君に会いに来ました」あ、俺目当てだった。うしっ。

「はじめまして、東清二です。役者さんですか？」

「はい。撮影中じゃないのに目に包帯を巻いているのですか？」

「はい。役作りだそうです。必要ないとは思うのですが」

「ちょっと包帯をはずしてみてください」

「はい」俺は俺の目についていた包帯をはずす。

「いい目をしてるじゃないですか」

「ありがとうございます。本当にありがとうございます」

「私のことを知らないみたいですが」

「すみません。大物だとは聞いているのですが」

「分かりました。それでいいです。少し撮影を見させてもらいます」  
「がっかりさせちゃったかな」。まあ、知らないものはしょうがねえ。

撮影が始まる。俺はいつものように目には包帯を巻き、いつもど  
うり目が見えないと訴えていた。が、途中で健さんからまったがか  
かった。

「これでは前に進んでないじゃないですか。きよじ君はいつまでた  
つても、解放されないじゃないですか」さすが大物。

「しかし、健さん。これで今までは上手くいつているんですよ」と  
食い下がる監督。

「台本を見せてください」恐る恐るスタッフが台本を渡す。

「こんな台本で？分かりました。私も演技します。きよじ君ちよっ  
と」健さんと内緒話。内容は、すぐに退院できる演技をお互いする  
と、しかもアドリブで。撮影が再開される。

「東きよじ君、私は地方で眼科医をしている高倉と申します」

「はじめまして高倉先生。僕いつ目が見えるようになりますか？」

「きよじ君、これは目がどうとかではなくて精神的なものです」

「じゃあ、見えるようになりますか？」

「目をぎゅっとつぶってください。いいですか、ぎゅっとですよ」

「はい」指示をされた看護婦の手で包帯がはずされる。

「わあ、明るいつ」

「きよじ君、だんだん目が慣れてきますからね」

「はい。わあ、高倉先生かっこいいや」

「大丈夫ですか？」

「冗談です」

「冗談でしたか。見えますか？」

「はいっ、高倉先生、渋いですね」成り行きを見ていた看護婦役の  
女性が、涙目で高倉先生ありがとうと言ったと言っている。

「きよじ君が目が見えなかったのはおそらく環境のせいでしょう。もう、私が来たからには大丈夫です」すると号泣する看護婦。今までもずっと一緒にやってきたんだもんなー。

「高倉先生、僕すぐ退院できますか？」

「きよじ君、二三日様子を見てよければ退院です」

「ありがとうございます高倉先生。永かったここまでくるのに」

「私が来たからには大丈夫です」ここでカット。

自然と拍手が起こる撮影現場。苦虫を噛み潰した顔の監督と田宮二郎。高倉健、さすが大物と呼ばれるわけだ。やるじゃねえか。

「きよじ君、ちょっと」健さんに呼ばれ、また内緒話。

「きよじ君、私はテレビが嫌いです。案の定、きよじ君はしんどい思いをしていたじゃないですか」

「じゃあ、好きなのは映画とかですか？」

「はい。きちんとした台本があつて与えられた役に打ち込むことができます。きよじ君は映画に興味とかはないですか？」

「その前に役者、高倉健はテレビが嫌いなんですね？」

「はい」

「分かりました」

監督にさっきの撮影を健さん抜きで、もう一度撮りなおそうと言いしぶしぶ了解を得る。田宮二郎と演技。ぐずぐずだが一応、撮れた。これで、健さんはテレビに出たことにはならない。

「すごいじゃないですかきよじ君」

「ありがとうございます」てへ。また、健さんと内緒話。

「きよじ君は好きな女の子とかはいないのですか？」

「いたけどお家に帰りました」

「そうですか。私も好きな女性がいるのですが上手くいきません」

「それ、俺に話すことじゃないですか。何でだめなのですか？」

「内緒です」

「はい」

「聞かないのですか？」

「はい」

「本当に？」

「はい」と廊下が騒がしくなってきた。カメラマンや記者がどんどん集まってくる。俺達ふたりはあっというまにかこまれた。

「健さん、女性問題について一言」

「次の映画について一言」容赦なくフラッシュがたかれる。

「すみません、きよじ君。もうすぐ「八甲田山」という映画の撮影があります。それについて何か知っていることを」

「寒くて遭難して仲間割れして殺しあった。自衛隊員が。こんなとこですね」

「ありがとうございます。それが聞けただけでも、良かった」

「健さんがテレビが嫌いなわけが分かった気がします」

「はい。それでは」

「はい」

「白い巨塔の子がいる」と記者のひとり。

「東宮御所にいたきよじ様だ」気づかれた。

「いいですかみなさん。この子に何かあったら私は、みなさんを忘れませんよ」そう言い残し、健さんはたくさんの記者やカメラマンと共にフジテレビを後にした。以上。



第十一話 高倉健、登場（後書き）

もし、よろしければ続編も楽しみにしてください。

第十三話 つかの間の休息（前書き）

ドラマの撮影中です。

## 第十三話 つかの間の休息

### 第十二話 つかの間の休息

リュシフェル

高倉健がいなくなった。圧倒的な存在感を残して。退院する設定だった台本も、また書き直された。視聴率がよく、やっぱりこのままドラマ撮影を続けるらしい。まだ続くのかよ。もう、無理だよ。決めた、もうやめよう。きめーた、決めた。何とかして勝手に帰ろうと。ちょうど監督が打ち合わせにきた。

「監督、もう辞めます。決めました。断固たる決意です」

「くっくっく。こっからどうやって帰るつもりだ？」

「もちろん歩いてです。チャオ」

「ちょっとちよつと待った。本気か？」

「高倉健がいない現場にいたくありません。では」

「分かった、休みをくれてやる」

「何も分かってないじゃないですか。高倉健と田宮二郎、演じる側として、どっちと共演したいかわかりませんか？それに監督も、クソだし」

「オレがクソ？聞き捨てならねえな」

「何度だって言ってあげますよ。この現場の監督はくそつたれだ」

「分かった、そのことはいい。ただ、お前のわがままで周りの人間や、スタッフにも影響がでるんだぞ。それでもいいのか？」

「考えておきます。とりあえず、しばらく休みということ」

「やったー、とりあえず休みは勝ち取った。あーあ、高倉健もう一度来てくれないかなー」。

休む、ただ休む。もう、目にも包帯は巻かれていない。自由だ。

ヒマなのでフジテレビを見学、いろんなところで歓迎され、もう出演しないのかと心配された。でも、もうどうでもよくない？

俺が出演しないフジテレビのテレビドラマ「白い巨塔」が放送された。目の見えない役の子供（俺）が何で出演しないのかと苦情が殺到した。次の放送も、その次の放送も。監督から土下座でも何でもするから、出演してほしいと頼まれる。素敵な状況になっていると思わない？まあ、どうでもいいけどね。

このまま、もう出演しないと思っていた。なのでスタッフにカメラの撮り方とか音の拾い方とかを教わっていた。物覚えがよくこのまま一緒にやっていかないかと熱心に誘われる。丁寧に断ったけどね。

もう出演しないと思ってた。以上。

### 第十三話 つかの間の休息（後書き）

少し短かったですか？すみません。これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1470c/>

---

きよじ

2010年10月8日13時04分発行